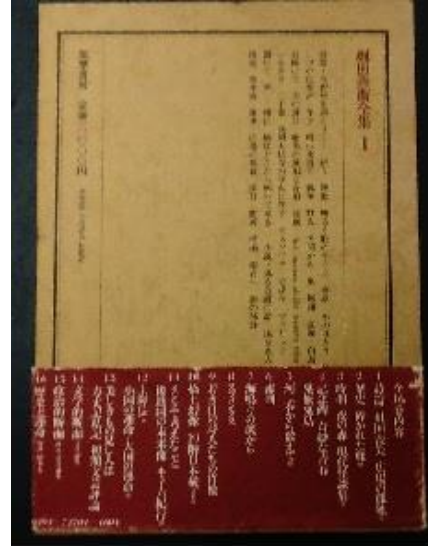


essais こころみ 2019年7月

(再掲) 2019年4月1日(月) 朝のうちは晴れ、新元号発表「令和」
『堀田善衛全集』見なおす試み

堀田善衛全集(筑摩書房 1974年6月20日発刊開始)



2019年7月1日(月) 雨⇄曇⇄晴

G20が終わり、市民生活は元にもどった。梅雨入りしてからずっと不安定なお天気。雨の合間に晴れる時もある。九州では「災害レベル」の大雨の予報。近畿もどうなるか。今日はハイキング靴で来た。

ー リーズレター2019年夏至 ー いきつくところ

22日に少しおくれて、25日に夏至レターをアップして、ご案内メールを出した。今回からレターのタイトルをふたたび『哲樂の中庭』に。

哲樂は「てつがく」、1998年のLEE'Sプロジェクト『知性のむこうに感性がある～哲樂の中庭～』が始まり。3ヶ年の期間を終えて、2001年7月にまとめた冊子のタイトルでもある。

リーズレターは事務所を開設した1995年から続けている。当初は郵送していた。ホームページを開設してしばらくした頃からはサイト上にアップし、メールでご案内。重ねること、今回でNo.98。

よく続けていると我ながら感心するが、もしこれを止める気になったとしたら、自分の中の何か大切なものを失ったということだろうと思っている。あるいは、その大切なものを超越する何らかの境地に至ったか。

ニューズレターを始めたのは、仕事柄まずは自分の人となりと伝える必要があると感じたから。何を感じ、考え、仕事し、いきているかと伝えることが肝心と考えてのことだった。

事務所を開設してしばらくすると、いろいろな人が人づてに訪ねてきて、話していった。帰りぎわに、「こんなに自分のことを話したのは初めて」という人が少なくなかった。中には5時間以上いた人もいる。

日常の中に〈話せる〉場がない、話せていない人が多いことに初めて気づいた。友人関係でもあまり深くは話し合わないという人もいた。さらには、「そもそも、話したいことがない人も多いと思いますよ」。

当時は一種のカルチャーショックをおぼた。わたし自身は自分の考えを表す方だったから、相手もそうしているものと暗黙のうちに考えていた。相手の考えに違ふと思えば、そう言っていたから。人によっては単にぶしつけな人と片づけられていたかもしれない。

そういうこともあって、人の知が自然に行き交う場という意味をこめた『哲樂の中庭』が生まれた。レター名にもした。20年経って、いまさらにこの意味が重要に思えて、『哲樂の中庭』。ここにいきついた感。

2019年7月9日（火） 曇

先週セミの初鳴きを聞いた。弱々しい声だった。予報では近畿の梅雨明けは平年より遅くなるらしい。夏本番はこれからだけど、先週土曜から昨日にかけては何となく夏の終わりのような感じがした。今年は蓮の生育があまりよくないらしい。

－ 『堀田善衛全集』を見なおす（7）－ 見なおして発見

9年前に読んだ『人生という作品』（三浦雅士 NTT出版）で一番印象に残ったのは、「過去はまだ決定されていない」ということだった。

過去のある事が、その後のある時点での意味あいと、さらに時間が経過し、未来に新しい変化が訪れた時、その意味あいがまた変わることを経験していた。だから、心から頷けた。

過去の意味はまだ確定していない。仕事でもこのことをよく言っている。先日の創業塾でも話したら、不意をつかれたような表情を浮かべて、たしかにそうだと目を見開く人あり。大なり小なり、誰もが頷くことではないか。

全集第一巻は今日で締めくくろうと、残りのページを流して読んだ。「大江健三郎」による解説、収録作品の「解題」を見ていた。すると、『広場の孤独』の箇所がやけに長かった。

この作品は芥川賞をとったもの。その祝賀会が開催されて、「堀田善衛」自身が挨拶スピーチをした。その内容がそのまま掲載されていた。この全集を買った時点では見ていなかった箇所を、30有余年ぶり？に読んで、びっくりした。

スピーチは青年時代のあるエピソードを語っているのだが、当時自分の身におこった想定外の出来事をきっかけに買って読んだという本の全集があるという。それが、わたしが20代初めに知人からプレゼントされた全集と同じだった。もらってからずっと書棚の飾り。

『堀田善衛全集』同様、なんとかしなければと思っていたものだった。でもそこまで手は回らないなあと考え、そのうち処分しようとは半ば決めていた。まさかその全集を「堀田善衛」が、自身でも「どうして買ったのか、それはどうもはっきりしない」けど、買って読んだのだとは…。

わたしにプレゼントしてくれた人は、何を思って贈ってくれたのだろう。もらった時もたしかにチラッと、なぜこの全集？と感じた。こうなったら、書棚の飾りのまま処分するわけにはいかない。ひょっとすると、未来に何らかの示唆を与えてくれるかもしれない。

長い時間をおいて動き出す過去のひとコマ、人の想い、偶然。

2019年7月12日（金） 日中は晴れ

今年の今頃は高温で大抵の人がバテていた。今年は平年並みが続き、しのぎやすい。宇治三室戸寺の象鼻杯は今日午前中に開催されたよう。初めて行ったのは、もう17、8年前。大阪市内では長居公園でもこの週末に象鼻杯があるらしい。人は多そうなので、別な日に蓮詣してみよう。

一 話し合うこと 一 日常の自然な会話に少し深い対話

もうずいぶん前、会社員時代の頃、友人から言われて気づいたことがある。知り合ってからかなりになるのに、「さん」づけで呼ばれる、他人行儀だというのだ。相手からは「ちゃん」づけで呼ばれていた。

でもわたしからはそうはしなかった。そうする感覚がなかった。その後ある時、道で親子とすれ違って思い当たった。子供に乱暴な言葉で叱っている親。そういえば親からそんな言葉で怒られたことはなかった。

もちろんそれだけではなくて、もって生まれた資質もあいまってのことだと思う。会話の時も他愛のない話を続けるということをしなない、できない。もし会社員生活を続けていたら、まわりから〈めんどくさい〉人と嫌煙されたかもしれない。今となつては、生る様になった。

『類は友を呼ぶ』、同じような感覚をもった人と公私ともに出会う。つい先日仕事の場で4人と対話した時は、〈前向きな諦め〉の話になった。よく言っていることだが、それが大事だと話した時に、一人が問うた。

『どんな時に、どんなことがあって、前向きな諦めができましたか？』。咄嗟のことで、その時点で思ったことを返したが、考えてみれば、前向きな諦めがついたとはおこがましい。そう努めているといったところ。

問いのおかげで、あらためて考えることになった。こんな具合にこの5人の対話はつながり、たがいに思考を発展させて、認識を新たにしたり、自分の考えのお墨付きを得たり。自然に深い対話になる時間。

対話することの意義は、先日日経の特集記事で紹介されていた「哲学対話」の取り組みがものがたっている。今の社会ではそういったプログラム化が必要になっているが、もう少し日常の自然な会話の中で展開されれば、メンタルヘルスも向上するというもの。

2019年7月18日（木） 曇り

昨年を思うと、今年は本当にしのぎやすいのだけど、さすがに蒸し暑い。なんとなくダルさも感じる。来週27日は土用の丑の日。

ー 過去にちりばめられた未来 ー 〈見なおす〉の効用

16日に更新した「読書をする」にも書いたが、うんと昔に読んだ本をいま再び開いて見なおす。これが、なかなかいい。

何がいいかというと、一つには〈当時〉に出会うこと。10代の自分が書いたちょっとしたメモ、本の広告片、もらった本には贈り主からの絵葉書がはさんであつた。一瞬にして当時の情景が浮かぶ。

絵葉書はある席で偶然隣り合わせになり、しばらく交流が続いた人だった。1995年の震災に合い、無事は確認したけど、それきりになった。すっかり忘れていたけど、さて今ごろどうしているだろう…。

いいことのもう一つは、こちらの方が意味深いんだけど、過去の本に今が埋まっていたということ。当時では注目しなかった記述に、今のわたしが共鳴・共感する。

過去の〈当時〉から、現在に至る長い時間の中で、自然に〈刷新〉されたきた自分の意識、認識、感覚の写しがそこにあつた。

ずいぶん前に読み終え、すっかり〈過去になった本〉になっていたと思いきや、そうではなく、今につながっていたんだという発見。これはなかなか、愉快というか、小気味よさを感じたのだった。

9年前にあるテーマについて独学独習した時期があつた。一つ知ると、別なことが知りたくなる。それを繰り返すうちに、まったく異なる分野のことを調べている。

“知は、分野は異なっても必ずどこかでつながっている…”。しばらくしてそういう認識を自分なりに持つようになった。

人間一人の知なら尚更、ある特定の質をそなえているわけで、それは確実につながっている。若い頃に自分で選び、ずっと手元に残していた本なら、自分の知の分身であるに違いない。

過去の本を見なおすって、なかなかいい時間になります。

2019年7月23日（火） 曇から晴

今日は大暑。昨夜は日付が変わった頃に大阪市内に大雨。この水分が太陽にゆでられて、これからかなり蒸し暑くなってきそう。体に堪えそう。滋養のありそうなものを食べておこう。

ー あらためて「佐藤弘樹」さん ー この世の役目

朝、すっかり「 α モーニング」から遠のいた。NHKFMのクラシックス番組かCDを聴くようになって、一ヶ月。朝の時間がつまらなくなった。

生前、3時間の番組のなかで佐藤さんは、その時々ニュースにしっかり自分の考えを切り込んでいた。聴きながら、わたし自身もいろいろと考えさせられていた。身支度の手をとめ、メモとすることもあった。佐藤さんなら、この間の「吉本」の出来事を何と語ったろう。

佐藤さんの訃報の後しばらくして、著名な女性経営者の訃報が新聞に載った。えっ?! まだ若いはずなのに…と記事に吸い寄せられた。享年55才。

人生、わからないものだなあ…。他人事ではあるけど、自分事でもある。もうずいぶん前からわたし自身が望む最期のイメージは、過去をざっとふり返り、今ここに至ったことを噛みしめ、“ああ、おもしろかった、それなりに自分を生きた!”と想いながら、息を引きとる。

早くに自分の役目を果たしていく人、長い時間をかけていく人。そもそも役目の意識をもたない人。それもまたよし。

わたしの回りは大なり小なり、役目を意識する人たちの世界。そして何かの折りには、彼、彼女たちの内なるその想いを聴き、対話する場面が訪れる。その〈間〉がなんと神聖なこと。

日頃たやすく語ることもなく、かといって大それたことでもなく、ごくごく自然に志向する自分の生きる上での役目。話せる相手でなければ話さないようなこと。人の中の聖なるものにふれる〈間〉。

佐藤さんともその〈間〉をもったのかもしれない。その佐藤さんがもうこの世にいない…。何度も確認する、今日この頃です

2019年7月26日（金）夕方、虹！



2019年7月29日（月） 晴

先週金曜夕方、虹を見た。二重の虹だった。虹といえば思い出す、はるか昔のこと。電車の窓のむこうに、「あっ、虹！」。思わず声をだしてしまい、少し恥ずかしくなったところ、座席となりの熟年女性が穏やかに合流してくれ、「ああ、きれいやね」。若かったのか、それに対して何も返せなかったのが、今も自分に残念。

ー夏はノスタルジックー雑感・雑記① アイデンティティ

「東洋人は夏に郷愁を憶えるといわれています」。ずいぶん前に大学の先生がそう話してくれた。とたんに夏にこれまで感じたわかっていた何かがそれだと体で合点がいつ、「あっ、そう、そう、そうです！」。

気候的なものか、風習的なものか、よくはわからないが、たしかに何となく今をはなれて、すこし俯瞰して自他ともにみるような感覚になる。それもよしとして、ここ最近感じ、考えることなどを書くとしよう。

今年に入って、あらためて目を見張っているのが、個々人の細部な差。日常生活や仕事の仕方など、その人の流儀のなんと、多彩なこと。聞けばきくほど、知ればしるほど、目を丸くする。

個々人が想像を絶するほど違っていることはよく了解している。だからその中身がほんの少しわかっただけだが、確認のよろこびと驚きあり。ただただ、感心するばかり。

何がそれほど違わせているのか。鍵になるのは五感で、そもそもその感度の差が出発点になっているのではないかとアテをつけている。合わせて5つの知識活動ー読む、書く、おぼえる、算じる、まとめるーがそこにどう絡んでいるか…。続きは、また次に。